

## 論 壇

### 大学博物館について

鎮西清高

〒602-0891 京都市上京区上御靈馬場町362-1-503

### Notes on University Museums in Japan

Kiyotaka Chinzei

Kamigoryo-Baba-cho 362-1-503, kamigyou-ku, Kyoto 602-0891(chinzei@mbox.kyoto-inet.or.jp)

#### はじめに

ヨーロッパの古い大学の古生物学教室を訪問すると、その標本室の立派さ、標本の質の高さにいつも圧倒される。それも当然で、これらの教室の出発がそもそもこれらの標本からである場合が少なくない。コレクションがあって、それらを研究する分野が育ち、発展してきたのである。ここに大学博物館の原点がある、といえる。何百年にもわたる無数の人々の研究の成果を積み重ね、たゆまぬ努力によって精選され、維持されてきたコレクションである。文化とはこのようなものだと感じる。

最近、幾つかの国立大学に大学博物館が設置された。これは長年にわたる関係者の努力が実を結び、文部省（文部科学省。以下では、当時の名称である文部省を用い、また関係部局課の名も、記憶に従って当時のままを用いたい）学術国際局学術情報課の年次計画として1996年から毎年1大学ずつのペースで設置を進めたものであった。

各大学博物館のホームページやパンフレットを見ると、それぞれ沿革が記されているが、これらを読んだだけでは、設立当時の日本全体の流れは必ずしもはっきりしないように思われる。私は、東京大学総合研究資料館の近くで長く過ごし、その後たまたま京都大学総合博物館の設立の仕事を関係した。この論壇に何か昔のことを書くようにと言われたので、大学博物館がこのような年次計画として設置されたいきさつのあらましを記録しておこうと考えた。この設立計画における大きな問題点は、重要な資料を所蔵している大学はほかにも多数あるにもかかわらず、それらの大学に対する手当がなされていない点であろう。これを解決するにはまた長い努力が必要とするのではなかろうか。この思い出の記が、そのために何か役立つことがあれば幸いである。私は実際に博物館のスタッフになった経験がないので、以下は外から眺めた大学博物館であり、もう過去の話になった事も多いが、お許し願いたい。

#### 大学博物館計画前史（資料館の設立まで）

大学制度と近代科学が欧米から輸入された当初から、大

学博物館は必要であると考えられてきた。創立間もない東京大学には、E. S. Morse 博士らの進言と尽力で明治12年、理工学8部門からなる「博物場」が設置され、クラシツ化石標本などを含む自然史標本その他が展示されていた。だが、明治18年、本郷キャンパスへの移転を機に廃止され標本は各教室へ戻された。また京都大学でも創立直後から博物館建設の動きがあったという。このようにそれぞれの大学でさまざまな博物館設立の計画が立てられたが、どこでも、その後の富国強兵策にもとづく実学を重視した大学の発展から取り残され、自然史資料はほとんど無視されたまま明治、大正、昭和の長い時間が経過したのである。いくつかの大学では昭和26年頃から「標本維持費」という費用で標本整理と保存に使う費用が支出されてきたが、昭和20年代から金額の改定がなかったため、物価の値上がりとともに有名無実化した。

この間、各大学では、それぞれ独自の努力で教室に割り当てられた建物面積を割いて標本室をつくり、研究費を投入して維持してきた。私は、学生時代に片平丁にあった東北大地質学古生物学教室の地下標本室で、属ごとに整理され引き出しに見事に並べられた貝化石標本や、ガラスケースに入った大型化石類を見せていただいて、整然とした美しさと、見たいと思った標本がさっと出てくる整理ぶりに感嘆したことを思い出す。もちろん、国立大学に博物館の名称と機能を備えた施設がなかったわけではない。地球科学関係では秋田大学付属の鉱山博物館（1910年秋田鉱山専門学校列品館として創立、1951年から鉱山博物館となつた）が、官制としての大学付属の博物館であった。他分野でもいくつも例があるが、多くは限定された分野の資料を扱う施設か、学内措置として設立され維持された施設であった。

標本は加速度的に増えていくので、当然このような自助努力だけでは支え切れない。1950年代の早いうちから、日本学術会議の自然史関係の研連が中心になって博物館機能を持つ国立の自然史科学研究センターの設立が検討され、1958年に学術会議総会の決議としてその設立が政府に要望された。この自然史研究センター構想は相当な時間をかけて政府と交渉が進められたようであるが、結局、国立科学

博物館の改組・拡充という形で収束した。

国立の自然史博物館計画が期待通り進行しなかったこともあって、東京大学では、独自の大学博物館を置く計画が立案された。この計画が少し違う形ながら結実したのが東京大学総合研究資料館の創立（1966年）であった。大学博物館が「資料館」になったいきさつについてはいろいろ言わわれているが、それらを総合すると、博物館とは文部省社会教育局（後の生涯教育局）が管轄する社会教育施設であって、大学には展示などを目的にした「博物館」と言う組織はなじまない、という主旨で文部省が許さなかつたためらしい。このため、東大資料館は発足当時はまさしく標本保管庫としての機能しか持たせられず、最初は偏光顕微鏡ですら研究用器棧だという理由で購入が許されなかつた。しかし、資料館が設立された結果、少なくとも東大では標本の保管・展示場所ができただけでなく、ここは、所属研究者の努力によってその後日本の自然史研究の一つのセンターとして機能し、大きな役割を果たしてきた。

多くの大学で東大と同様の「資料館」設立を希望したにもかかわらず、その後30年にわたって「資料館」の建設が一つも認められなかつた。その理由はわからないが、当時文部省内には資料館についておよそ見当違いと思われる話が広く流れていたようである。ずっと後に京都大学で博物館創設に関係した頃、私は事務局の関係者から「資料館はひどいらしいですね」といわれてびっくりした。何がどうひどいのかと聞くと、「よく知らないがあれば失敗だったそうですね」というのである。文部省内には、資料館は巨大な物置でしかなく、省として始末に負えず困っている、という見当違いの話が流布していたらしい。この認識不足とデマの恐ろしさには、驚くほかない。

そんな雰囲気のなかではあったが、1977年頃、文部省情報図書館課（後の学術情報課、当時の課長は前文部科学大臣の遠山敦子氏）は全国の主要大学が所蔵する標本の現状調査を行つた。これは標本の種類、数、保存状態などの包括的な調査で、東大資料館の速水 格氏ほかのスタッフが実行の中心となり、多くの関係研究者を巻き込んで詳細な調査が行われた。このような調査が行われた直接のいきさつを知らないが、大切な標本が建物にあふれ散逸しかけているという全国の大学からの切実な声が文部省を動かした結果であることは確かである。調査の結果は大部の報告書としてまとめられた。当時、この調査に基づいて政府が具体的に何らかの手を打つことを期待したのであったが、残念ながらその後長く何も起こらず、20年近く放置されたのである。

だが、この調査は、後の大学博物館創設に大きな影響を及ぼした画期的なものであった。このときの調査は相当に徹底したもので、各大学ができるだけ基準を揃え、標本の数などもほとんど一つずつ数えるような詳細な調査が行われた。そしてこれが今回の大学博物館創設の際の基礎的かつ直接的な資料となつた。実際、最近の博物館設置の年次計画で文部省が選んだ設置大学は、このとき所蔵標本が多

く、また整理が比較的進んでいるとされた大学であった。これだけ徹底した調査をするのは容易でなく、博物館創設のための概算要求書に記載した標本数なども、このときの調査結果を利用した場合が多かつたようである。

## 学術審議会学術資料部会の報告

1995年6月、文部省学術審議会の学術情報資料分科会学術資料部会は「ユニバーシティミュージアムの設置について（学術標本の収集、保存・活用の在り方について）」という中間報告を学術審議会総会に提出した。これは、討議の中間報告として大学博物館の必要性とあるべき姿についてまとめたものである。

中間報告の形をとっているが、実際には、この段階で文部省が動き出して概算要求に盛り込み、この翌年4月から1年に1大学のペースで大学博物館を設置して行ったのだから、実質は最終報告であり、しかも実施計画であるといえる。なぜそんなに急いだか詳細を知らないが、あちこちの大学から陳情と概算要求がくり返され、また、収集した標本類が次々と国外に流出する、置き場所がなくて雨漏りのする倉庫にシートをかぶせて置いている、廊下に積み上げてあって通行もままならない、といった状況がマスコミによって写真入りでくり返し報ぜられてきたことがあると思われる。概算要求に何をとりあげるかに関して省内の事情もあったのかもしれない。

学術審議会学術資料部会の中間報告は、当時の学審・文部省の考え方や、創設された大学博物館の性格を知るのに好適なので、以下にごくかいつまんで紹介する。

## 中間報告「ユニバーシティミュージアムの設置について」の要旨

### 1. 学術標本の現状と課題

学術標本は研究に不可欠な有形の一次資料で、近年の分析法、解析法の発達により、新たな情報を生みだしうるものとして重要である。しかし、現在は整理が行き届かず、保存・活用の体制がなく、データベース化もしていないので部外者は利用できない。学術標本は異なる分野の研究者でも容易に活用できる体制にすることが重要である。欧米では多くの大学に大学博物館が設置され、標本の多面的研究、学術情報の発信／受信基地として活発に機能している。

### 2. 標本の保存・活用のあり方、ミュージアムの整備

学術標本は、その標本を収集／研究した研究者でなくとも取り出しが可能で、自由に研究できる状態に保存する必要がある。従来の学問体系に従つた組織ではそれは期待できない。標本はデータベース化し、展示し、他の研究者・学生、地域社会にも公開する。実証的な研究やそのための教育を強化し活力をつけるために、標本を活用するミュージアムの設置が有効であり、標本の収集・保存・整理・公

開のための要員と、専用施設が必要である。

### 3. ミュージアムの機能

ミュージアムとは、大学で生み出した学術標本を保存、公開して情報を提供し、その標本を対象とする独自の研究・教育を行う施設である。その機能として、

1) 収集・整理・保存、分類収蔵、2) 画像データベースを構築し広範に提供、学生・研究者・地域住民の相談による、3) 標本を公開・展示し、貸し出し、交換をして研究・教育に供する。大学の研究から生まれた創造的、革新的な意見を地域社会に公開、周知する。4) 学術標本を基礎とした先導的・先端的取り組みを支援するため、独自の研究を計画・実行する。5) 標本を基礎とした大学院・学部教育への参加。博物館学芸員養成、生涯教育にも協力をする。

### 4. ミュージアム整備の基本的な考え方

ミュージアムは学内共同利用施設とし、必要な施設・設備と、専任の研究者、標本の整理・保存・公開業務に携わる専従職員を配置する。

設置するのは、研究実績・標本群の蓄積があり、一次資料化がほぼ完了していて、標本を活用する研究が今後とも発展する可能性のある大学とする。このとき地域性、標本の特質も考慮する。

また、ユニバーシティミュージアム協議会を設置して、標本情報のネットワーク整備等を協議したり、諸外国とのネットワーク化を図り、研究に世界的規模の視野と位置づけを与える。

というものである。最後に、この構想は重要だから直ちに着手すべきであること、今後図書館・ミュージアムなど関連施設をネットワーク化し、知的情報の発信拠点とすること、が述べられている。

### 大学博物館の創立（京都大学の例）

学術審議会の中間報告を受けて、各大学は直ちに具体計画の立案を急いだ。東京大学では、既に設置されていた総合研究資料館を中心に、しかし従来の分野別の部門制ではなく、全く新しいスタイルの横割り的組織をもつ博物館が立案され、1996年4月にトップを切って設立された。そして2002年までに8大学に博物館が置かれたのである。その設立に至る詳細ないきさつは各大学によってそれぞれ異なる。ここでは、一例として京都大学総合博物館設立までの経験を簡単に紹介したい。

京都大学には東大のような資料館が存在しなかった代わりに、文学部の付属施設として1914年創立という長い歴史を持つ「文学部博物館」があった。そのためもあって、新しい博物館計画は、理学部・農学部を中心とする「自然史博物館」として始まった。長い前史は省略するが、1986年から「自然史博物館」設置の概算要求を続けていた。

京大で博物館計画を進めるとき問題になったのは、文学部博物館およびその他の学部・研究所などがもつ資料室・標本室との関係であった。ことに文学部博物館は歴史が古いため、既に立派な展示室と資料室・研究室を備えた5,000m<sup>2</sup>を超す建物があった。そのため、初めは各博物館・資料室の独自性を最大限に生かすように、「京都大学博物館機構」という比較的緩やかな連合体組織を考えたこともあった。1989年からは、総合博物館の中に、文化史、自然史、技術史の3博物館をおき、それぞれ展示をおこなうという構想で概算要求を始め、1996年までこの方式で文学部と理学部で交代で概算要求書を提出すること続けた。この間、文部省に補正予算で自然史博物館を建てるから計画案を至急に出せ、といわれ、実現寸前までいったこともあった。3館並立の形にした理由の一つに、一方所にまとめた総合博物館を建設する敷地が容易に見つからなかったこともある。敷地問題は京大の博物館計画の中でもっとも困難な問題の一つであったが、ここではその詳細は割愛したい。

学術審議会の中間報告がでて1年たたないうちに、東大で総合研究博物館が発足した。京都大学では上記の3博物館構想をもって文部省に相談を行ったところ、文部省では1大学1博物館とする考えなので3館並立は認められない、しかし東大と同じでは困る、京大独特の構想にしてほしい、という。とはいっても、(東京大学のような横割りの構成でなく)従来の学問体系に基づいた文化史、自然史といった縦割りの組織にするのならば、財務・人事関係の各省庁を十分説得できるだけの理論武装をしてくるように、とのことであった。いろいろな構成案を持ち込み説明を試みたが、どれにも係官からはよい反応がなく、東大と同じく情報発信部門などを置く案に至って初めて「わかりました、ではそれで行きましょう」ということになった。

京都大学総合博物館は、1997年4月、資料基礎調査系、資料開発系、情報発信系の3部門と事務部からなり、教官定員9名で発足した。幸い学内の協力によって、既存の文学部博物館に隣接した場所に敷地が決まり、6,000m<sup>2</sup>余の新館が2001年に完成、一般公開を始めて現在に至っている。

### 大学博物館の役割

東大・京大に続いて、東北大学(1998)、北海道大学(1999)、九州大学と名古屋大学(2000)、鹿児島大学(2001)、大阪大学(2002)と1年1大学のペースで8大学に設置されて、この計画は一段落した。これらの大学が選ばれた理由を推測すると、「中間報告」にあるように、研究実績・標本群の蓄積があり、一次資料化がほぼ完了していて、標本を活用する研究が今後とも発展する可能性のある大学、ということであったようだ。地域性も考慮されたのであろう。

このようにして発足した大学博物館の理念や組織の基本は、いずれも「中間報告」に盛られた考え方へ従つたものとなった。東大・京大だけでなく、たとえば九大総合研究

博物館研究部は一次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系からなり、また北大総合博物館研究部は資料基礎研究系、資料開発研究系、博物館情報メディア研究系、という構成になっている。すなわちどの博物館でも資料データベースの電算化、デジタルミュージアムの確立を重要な業務の一つとし、人員を割り当てている。文部省の方針として、学審「中間報告」の中のいくつかの語句をキーワードとし、それに合致した構成と機能を備えた博物館を設置した、ということになる。行政としてはこのやり方が常道なのであろう。

だが、大学博物館の組織、運営には様々な道があり、大学によってもっとそれぞれの特徴を生かした方式があつてよかつたのではないか、と思える。仮にこのような横割り構成のとおりに業務を分担・遂行したとすれば、大学博物館のもっとも基本的な役割である標本の収集・整理・保存、分類収蔵、など（すなわちキューレティング）が十分にできなくなるおそれがある。大学博物館で収蔵する資料は何よりもまずその大学で研究された学術標本であり、これを適切にキューレティングするのは、当然その分野の専門家でなければ不可能である。横割りの組織でこのような困難を避けるためには、現実には複雑な2重構造の運営をしなくてはならないことになろう。

大学博物館の業務に関連して思い出されることがある。先年惜しくもなくなられたS. J. Gould氏がハーバード大学のMuseum of Comparative Zoologyに所属しておられたことはよく知られている。私が訪問したとき、彼は机いっぱいに陸棲巻貝の標本を並べて、小さな字でラベルを次々と書いていた。自分で書くのですか、と聞くと、「私はこのキューレーターですから（当然です）」といわれた。手で書くかどうかはともかく、理論派でマスコミにも著名で多忙に違いないGould氏の、その標本と業務に対する姿勢は印象的であった。

収蔵資料記録のデジタル化だけでなく、資料の映像化や各資料の包含する多様な情報のデジタル化、電子タグによる資料の管理・展示など、博物館のデジタル化は、これらの博物館として当然の方向であろう。しかし、なんと言っても大学博物館は一次資料の研究と標本のキューレティングが第一の使命であり、整理が行き届いてのデジタル化だと思う。どこの大学博物館でも数少ない教官ポストを割いて直ちに取り組まなくてはならないことかどうか。しかしながら、博物館は大学が社会に開いた窓としての役割も

担っているので、それを実現するための情報発信あるいはデジタル化の分野には存在意義があるといえよう。

以前、「京大総合博物館の展示解説は難しい」というある市民の感想を聞いたことがある。私はこれに対しても、やはり、大学博物館の本来の役割を理解してください、といいたい。大学博物館の展示は、一般に公開されてはいても、大学の研究・教育に資するのが第一義的な役割である。研究成果を誰にでも理解される言葉で解説する努力は必要であろうが、それはなかなか難しいことだと思う。いわばこれは特定の人を主対象に、特定の目的のために設置された施設で、大学図書館に一般向けの雑誌や本がないのと同じである。公共の博物館の展示と大学博物館の展示はこの点で違うのではないか。

何はともあれ、一部の大学だけとはいえ博物館ができたのは実に大きな進歩であり、既に自然史研究のセンターとして着々と実績をあげている博物館があるのはすばらしいことである。だが、これから最大の問題は、今回の一連の計画から漏れた大学はどうするか、であろう。古生物学・地質学関係では、今回博物館が設置された大学に匹敵する資料を所蔵していると思われる大学も少なくない。どこも模式標本を含む貴重な標本群が集積している。たとえ量は少なくとも大切に保存・活用しなくてはならないのだが、これからまた何十年もそのために苦労する人が出てくるのは心が痛む。

大学博物館は、大学にとって図書館と対になるべき施設であると思う。図書館が文字で記録された資料を扱うのに対し、博物館は自然や人工の実物資料を扱う施設である。どちらが欠けても大学本来の研究・教育に支障を来すはずで、すべての大学に図書館があるように博物館もあるべきだと思う。国立大学法人化と実学重視の嵐の中ではあるが、それに向けて努力しなくてはなるまい。

## 謝辞

この小文をまとめるに当たり、西野嘉章氏の「大学博物館－理念と実践と将来－」（東京大学出版会、1996）のほか、文教ニュース1325号（平成7年7月31日号）の記事「ユニバーシティミュージアムの設置について」、および各大学博物館のホームページとニュース誌類を参考にした。なお速水 格氏には粗稿に目を通して頂き、いろいろご指摘を頂いた。記してお礼申し上げる。